



統合失調症を患う母とともに生きる子ども

～番外編⑥～

再会・10代の私たち



松岡園子

先日、中学時代にいちばん仲良くしてもらっていた A ちゃん（対人援助学マガジン 34 号『それぞれの電話～13 歳～』、35 号『奏でる～13 歳～』、36 号『お弁当～14 歳～』、37 号『揺れる～14 歳～』、38 号『夏の空色～15 歳～』、39 号『スクランブルエッグ～15 歳～』に出てきた「林さん」から十数年ぶりに連絡がありました。

私が中学時代(大変だった時)に、A ちゃんのお父さんお母さん、お姉ちゃんにもとてもよくしてもらいました。高校生になるとそれぞれの場所で勉強や仕事をし始め、20 代前半ごろから、なんとなく連絡を取らずそのまま時間が過ぎてしまっていたのですが、「どうしているのかなと思って」と、私に電話をくれたのです。

会わずに十数年も経つと、お互いに周囲の状況が変化しすぎており、そこからまた連絡を取ってみようという気持ちにも戸惑いや緊張感が混ざり、気になったとしても行動に移すことが難しくなることもあると思います。

電話で A ちゃんは、十数年前に私にあることをしてしまい、傷つけてしまったのではないかと、とても悔やんでいる様子でした。それから十数年間、ずっとそのことを気に病んでいたようで、「あの時はごめんね」と言いたかったとのことでした。私にすると、そんなことは全く気にしていなかったのに、反対に A ちゃんに気を遣わせてしまっていたことを、申し訳なく思いました。そんな気持ちを抱えながら、自分から連絡をしづらい心境だったはずなのに、メモに残っていた私の電話番号を見つけて電話をかけたのだと言っていました。きっと勇気が必要だったはずです。

A ちゃんのお父さんが、中学時代の私をよく覚えてくれていて、時々「そのちゃん、どうしてるかなあ？」と言っていたので気になって……とも話していました。私は中学時代に一緒に居てくれたことをとても感謝しているし、ここ数年で市町村の研修会などで自分の体験を話す機会が増え、そこで、当時 A ちゃん家族が私にしてくれて嬉しかったことをいつも話しているよ、と伝えました。

話すのが十数年ぶりでも、すぐに中学時代の私たちに戻って、他愛もない話で盛り上がり、笑い合っていました。お互いの状況は変化しており、Aちゃんのお父さんは病気で入院し、お母さんもこのところ元気がないとのこと。Aちゃんもこの十年ほど、仕事や親の看病などでバタバタしていたそうです。

中学時代のことをお互いに振り返ると、Aちゃんから見た私はとても大変そうだったとのこと。

「おばちゃん、大変やったもんなあ」

「いつも、中学校の帰りに、私の家に寄って、お菓子を食べて帰ってたなあ」

「うちの父さんが、一緒に淡路に連れて行ってくれたりした～」

「ジャニーズのコンサートに2人で行ったなあ。よく親はいかせてくれたと思わん？ 中学生2人で」

Aちゃんの口から懐かしい話がどんどん出てきます。私が中学生当時、母は統合失調症の症状が再発・悪化し、私がどこへ行くということにも関心を持つことができなかった時期です。中学生の2人が神戸から大阪までコンサートに出かけることを、自分の両親がよく許してくれたと思うと、当時の両親ぐらいの年代になったAちゃんが話すのを聞いて、それもそうだなと思いました。でも、私はそのお陰で、母のこともありながら、楽しい時間を過ごすことができたのです。

また、私が金銭トラブルになってしまったBちゃん(対人援助学マガジン35号『奏でる～13歳～』に出てきた「奈央ちゃん」)のことも思い出して、

「あの時はBちゃんが本当に怖かったから、逆らえなかったけど、今思うと何が怖かったんやろうね？ 何も怖くないやん」

と笑います。私もそう思いました。要求を断ったからといって、無視されたり嫌われたとしても、なんてことないのに、当時の私たちには一大事に感じられたのでした。

Aちゃんとの再会で、私は当時の自分と今の自分では、何が違うのかと考えてみました。10代の頃は、自分のいる場所だけが世界の全てだと思い込んでしまうことが多かったような気がします。その時にいくら大人の人に「違う世界もある」と言われても、経験を伴っていないため実感しにくいと思います。それを埋めていくのが、経験、体験をしながら、自分の世界を広げていくことなのではないでしょうか。それは実体験だけでなく、人から聞いた話、本を読んで得た知識も含まれると思います。

たとえば中学当時の私が、母と私だけの世界が全てだと思い込んでいたとしたら、それはとても苦しい体験になったと思います。でも、私と母との世界を広げてくれるような人や体験があちこちにあったから、私は母のことだけにとらわれず、自分のことを考えたり、楽しみを見つけ出すことができたのではないかと考えました。

私は、学校の帰りにAちゃんの家へ寄らせてもらうことや、遠出と一緒に連れて行ってもらうことができたのは、幸せだったと思っています。大変だといわれる状況にひとりで立

ち向かわなければならなかったとしたら、とても辛かったのではないのでしょうか。

Aちゃんも、Aちゃんのご両親も、統合失調症の症状に苦しむ母と一緒に暮らしていた私を、助けたとは思っていません。私も母をケアしたり、助けたとは思っていないのと同じではないかと思います。

「ただその時を一緒に過ごし、一緒にいた」というのが、私たちの感覚に近いと思います。

Aちゃんの電話から10日ほどして、Aちゃんのお父さんが亡くなりました。おじちゃんが「Aちゃんを頼むで！」と願いながら、私たちをまた引き合わせてくれたような気がしています。